

## ひくまの：浜松医科大学附属図書館報. No. 30

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 浜松医科大学附属図書館<br>公開日: 2018-09-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 浜松医科大学附属図書館<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10271/00003361">http://hdl.handle.net/10271/00003361</a>                             |

## ひくまの

Hamamatsu University School of Medicine  
Library Bulletin

March, 1996

編集・発行 浜松医科大学附属図書館 〒431-31 浜松市半田町3600 Tel 053-435-2171 Fax 053-435-5140

## Patient「耐え忍ぶ者」の心を読む

学長 川 島 吉 良

医道の真髄は、心・技・知（頭脳）と考える。医の心とは病者（患者）の訴えを良く聴き、その苦悩や苦痛を十分理解して、それらを癒し健康を取戻し、一日も早く社会復帰出来るよう全知全能を傾ける医師としての正義であり、技とはその正義を実現するための最善の手段で熟達した医療技術が求められ、知（医師の頭脳）とは前二者を指令して個々の病者に即応出来る高度の専門的知識であり、これら三者を身に着けている医師が良い臨床医と言われる所以である。これは大変に難しく医師の一生涯に負わされた命題である。

とりわけ困難なのは医の心を涵養することである。先輩の医師を見習い、患者さんの臨床体験から学び、講義を聴き、体験記を読み、自己学習などあらゆる努力が要る。

先輩医師は医の心の教育を積極的に行うべきである。医師自身は、死の不安と闘いつつ生を願う患者の心、病苦に揺れる患者の心、今日も黙々と耐え忍んでいる病者の心をよくよく学ばねばならない。

解剖学の分野で立派な業績を残し、自らが癌で44歳の若さで亡くなった東京大学教授・細川宏先生の遺稿詩集「病者・花」から私は多くのことを学んだ。「病者を英語で、patient と言い、耐え忍ぶことを意味する。病者は我が身を襲う病苦の激しく且つ執拗な攻撃をじっと耐え忍ぶのだ。一息吐くのに精一杯の力が要るという絶望的な世界にあっても、病苦の激しい時こそ春を待つ細い竹のしなやかさを思い浮かべて、じっと苦しみに耐えてみよう。」と書き残し、さらに「若しも医師が不治の病を宣告する時、その後の毎日をどうその患者と対決し会話を交わしていく積もりか、それだけの人間的力量を果たして医師に期待してよいものか。」と、死力を尽くして癌と闘った教授は「石に咬りついても早く治らねばならんぞ。」と書いて12日目静かに息をひきとった。

科学知識による自己コントロールと言う生活信条を実践し、医学・医療事情に詳しい柳田邦男氏の「犠牲－わが息子・脳死の11日」－苦悩の末に自殺をはかり脳死状態に陥った我が子を看取った手記から学ぶことは多い。「現代医学は治癒の見込みのない患者を見放しがちだが、死が避けられない者こそ、かけがえのない一日一日を生きているのだから、そのクオリティ・オブ・ライフ(QOL)を大事にしたケアが必要である。死にゆく者の時間を最大限に輝きのあるものにすることを支援すると言う問題は、癌患者でも救急患者でも同じレベルで考えられるべきではないか。」と問題を提起した。そして、息子の主治医が「脳死であっても最後までお世話します。」と言ってくれたこと、若い看護婦が「聴覚だけは最後まで生きています、たくさん声をかけてあげて下さいね。」と言ってくれたこと、そういう思いやりと行為はターミナルケアの心につながるものと好感と信頼感を医療人に抱いたと結んでいる。

平成5年10月28日の本学の解剖体慰霊祭で県西部浜松医療センター院長の室久敏三郎先生から講話



「荒金天倫老師の生きざま」を拝聴した当時の感動が鮮明に蘇って来る。荒金天倫老師は静岡県引佐郡引佐町にある臨済宗方広寺派総本山・方広寺の管長であった。荒金老師の主治医をなさっていた室久先生は昭和62年10月、荒金老師の肝右葉に直径10.5センチの腫瘍を発見した。これを悟って「肝臓にダイヤモンドが入っているわけではない。癌なら癌とはっきり教えて欲しい。」とのユーモラスな中にも厳しい禅の修行で培われた鋭い眼光と気迫が漲った老師の言葉に、「悪性の腫瘍、しかもかなり進行しています。」と率直に宣告された。すると老師は「やらねばならぬ仕事があるから、あとどの位生きられるものかを教えて欲しい。」と。老師は青少年研修道場「円明閣」を3年計画で完成させたいと願っていた。室久先生等医師団は一年半の余命との見解で一致していたが、室久先生は「3年は保証できるでしょう。」と願望込めて申し上げた。老師はその時の心境を「癌と知って平気だったと言えばウソになる。癌と宣告されて、ああそうですかと笑っておられるものではありません。顔からジーンと血の気が引いてゆく思いがしました。」と語られた。更に「あと3年と言われたので、それならば精神的に30年分に生かして使おうと思ったのです。それから毎日がこの建設のための仕事であった。生きる時は精一杯生きる。死ぬ時は一生懸命死ぬ。秋になって木の葉が散る時に、おれは散るのは嫌だと言ってしまうのがないのです。」と述懐された。その後主治医を全面的に信頼し、エンボライゼーション等の治療を受けながら円明閣の建設資金集めに東奔西走の日々であったが、平成2年1月7日に遷化された。円明閣の落成式が行われたのはそれから半年後であった。

平成7年4月9日、第24回日本医学会総会が名古屋市で開催され、大江健三郎氏による特別講演「癒される者として」が行われた。大江氏が平成6年12月、ノーベル文学賞受賞講演「あいまいな日本の私」で「私は渡辺一夫のユマニズムの弟子として、小説家である自分の仕事が、言葉によって表現する者と、その受容者とを、個人の、また時代の痛苦からともに恢復させ、それぞれの魂の傷を癒すものとなることをねがっています。日本人としてのあいまいさに引き裂かれている、と私はいいましたが、その痛みと傷から癒され、恢復することをなによりもとめて、私は文学的な努力を続けてきました。」と述べられた事、更に「癒される者」の中で、長男光さんの誕生直後に訪れた広島市の原爆病院長の重藤文夫先生、光さんの手術を担当された森安信雄先生から影響を受けたとの文章から私は癒される者の心に深く思いを致した。

それは次のような文章や言葉である。「私には知的障害のある光と言う長男がいる。光が脳の手術をする時、医師から知的障害を持って生きなければならないことを告げられた。しかし光が生きていくために手術が必要だとも言われた。私はその時、医師は医者としての正義を実現しているのだと思った。そして、自分もそれに従おうと思った。光は現在、32歳だが、これまでずっとあの時の正義に導かれてきたと感じている。」「脳の手術をしてくれた医師が亡くなったと知った時、光はそれまでになかったような乱暴な言葉で怒りを現した。その後、三日ほどすると落ち着き、鎮魂歌を作曲した。光はおそらく、好きだった医師の死を通じ、死がどう言うものか深く考えたのではないか。」「光の音楽を聴いて、私や妻が感じますことは、まず医師たちの援助によって、光を癒すことに努めてきた、そして癒すことができた、ということです。同時に、そのこと自体によって私たちが癒されてきた。むしろ光という子供が恢復してゆく過程に立ち会うことによって自分たちも癒されてきたということです。」

#### 引用文献

1. 小川鼎三、中井準之助編：詩集 病者・花－細川宏遺稿詩集 現代社 1985
2. 柳田 邦男：犠牲－わが息子・脳死の11日 文芸春秋 1994年4月特別号
3. 柳田 邦男：脳死、私の提言 文芸春秋 1995年4月号
4. 柳田 邦男：犠牲 文芸春秋刊 1995
5. 室久敏三郎：平成5年度解剖体慰霊祭講話 浜松医科大学学報 第78号 1994
6. 大江健三郎：あいまいな日本の私 岩波新書 岩波書店 1995
7. 大江健三郎：癒される者として 第24回日本医学会総会講演集 1995



## 浜松医学校と虎岩

第三内科 助手 倉田千弘

私の母の旧姓は「虎岩」という。「虎」に「岩」とは凄い苗字だと子供心に思ったものである。母の従兄弟の一人がこの奇妙な名前に興味を抱き、その系譜などを調査したことがある。その調査結果を従兄弟は1982年に手紙で母に伝えてきている。最近、その手紙を初めて見せてもらったが、結局なぜ「虎」に「岩」なのかは判明しなかったようである。その手紙に記された調査結果の概要は次のようである。1000年余りに遡って貞純親王という人からの系譜で始まっているが、多少詳しくなるのは戦国時代になってからである。武田信玄の配下だった虎岩播磨守頼孝が信長との戦いに敗れ、その敗北の惨めさから武士にしようと思っていた三人の子供を藪医者にした。一人（虎岩道晴）は信州に、一人（虎岩道信）は遠州に、一人（虎岩道雪）は仙台にと、武士の残存追跡を避けるために離れ離れにした。1981年の時点で、虎岩という姓の拠点が長野県下伊那郡阿智村駒場と静岡県島田市本町通と仙台の3ヶ所にあるという。阿智村に2軒、島田市に2軒あって、仙台での詳細は未調査だが現在も医者らしく、その子孫の一人は医者として富士市にいと伝えられていると記してある。

母の実家は長野県下伊那郡阿智村駒場にあり、実家近くの浄久寺には虎岩道晴の墓がある。駒場の大火事の時に系譜が紛失し、母の曾祖父から虎岩道晴までの繋がりはいくつわからないらしい。虎岩播磨守頼孝が敗軍の将だったためか、「虎岩は戦いに勝てない」との戒めが言い伝えられている。確かに、信州の虎岩家の人たちは人がよく、戦に勝つタイプとは思えない。

従兄弟は調査結果の最後に、伊豆木（現飯田市三穂。飯田は下伊那郡阿智村の隣で、母の親戚も飯田から阿智村にかけて散在している）出身の「虎岩武」という者がいて、本を出しているらしい…と結んでいる。今回、川島学長から依頼されたのは、この虎岩武（1856～1894）について書くことであった。明治のはじめ頃、信州の虎岩家の一人が浜松の医学校で働いていたような話を聞かされたことはあった。とは言え、かなり不確かな話で、浜松に医学校があったことなど全く知らなかったのも、何かの間違いだろうと思っていた。ところが、学長から明治時代に浜松に医学校があって虎岩武なる人物が確かに勤めていたと聞かされ、さらに母に尋ねてみると、虎岩武から母の祖父（虎岩直市）宛ての手紙が長野の実家に残されていることがわかった。その一つ（明治24年9月25日消印）のコピーが手元にあるが、残念ながら私には解読できない。

川島学長が虎岩武について書くよう指示されたのは、虎岩武が浜松医学校に勤めながら、米国の医学書“CONSPECTUS OF THE MEDICAL SCIENCES”を翻訳し「七科約説」として出版した人達の一人だったからである。明治初期の代表的な医学の教科書であったとされる「七科約説」の翻訳に主として携わったのが虎岩武であり、彼は3年間「七科約説」の翻訳に没頭したという。ちなみに、この翻訳を2000頁に及ぶ医学書として出版にまで成功させた浜松県立病院長兼浜松医学校校長の太田用成も長野県飯田の出身であった。

その後、虎岩武は浜松を離れ愛知公立医学校に勤めるが、再び浜松にもどり静岡県立浜松病院（この時、浜松県は静岡県に統合されていた）に勤めた。その後、福井県敦賀病院長や引佐病院長などを経て、結局、故郷の飯田市で医院を開業した。「七科約説」の翻訳完了後のおよそ6年間に、忙しくあちこちを転々とし、なおかつ、この間に結婚と離婚も経験したらしい。当時としてはありふれたことかもしれないが、一所に落ち着けなかった理由を想像してしまう。開業後、10年間は飯田にとどまったようだが、ジフテリア患者の往診で感染し38歳で亡くなっている。

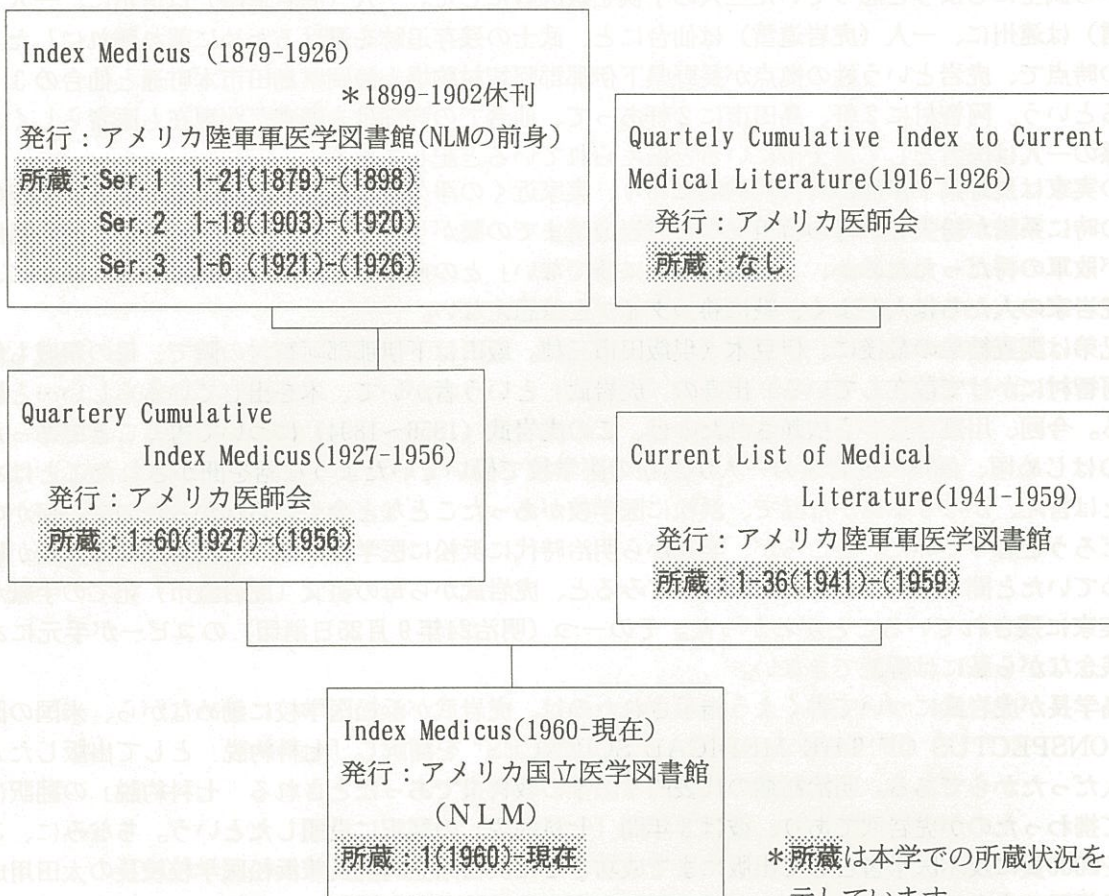
この原稿を書く前に信州を訪ね、虎岩武と母の実家との詳しい関係を調べたかったが、正月休みも病院通いで、できなかった。私の日常の大部分が病院に縛られている割に、その効率は非常に悪く、診療も研究も教育も十分な成果をあげていない。その反面、医療の現場には効率と無縁な側面もあるように思える。業績最優先となりつつある大学医学部において、本当にりっぱな臨床医が育つだろうか。静岡県の医師不足を補おうと臨床医養成を主目的に作られた浜松医大の一期生として、また、その一教官として、浜松医大の今後のあり方と自分の生き方について考えを巡らすことがある。およそ百年前に浜松医学校の教官であった虎岩武はひたすら「七科約説」の翻訳に没頭するばかりで、浜松医学校や自分の将来について考えることはなかったのだろうか。今年、44歳（虎岩武より6歳も長生き）になる私は新たな道に踏み出すべき時にあるのかもしれない。どんな道を歩み始めようか、虎岩武の意見も聞いてみたいものである。今年中には、なんとか暇を作って虎岩武の郷里を訪ねることにしよう。



# INDEX MEDICUS

## (Part 1)

INDEX MEDICUS は、医学分野において最も有名で広く使われている二次資料です。編集発行はアメリカ国立医学図書館（NLM）で、創刊年は1879年ですが、現在の形態になるまでに誌名、編集の形などが以下に示す通り、たびたび変わっています。



現在のような形は1960年からですが、上記資料を使用すれば100年以上も前の文献も検索することができます。また、1966年からはデータベース化され、Medline という名称で CD-ROM・Online での検索も可能になりました。

INDEX MEDICUS は、主に主題からと著書名から文献を検索する場合に使用しますが、3～9ヶ月のタイムラグがあります。収録対象は、アメリカを始めとする世界中の医学および関連領域の主な雑誌およそ3,000誌です。本文が英語の論文は全体の約70%を占めており、日本の雑誌は118誌（1995年現在）で、そのうち半数は英文誌のため日本語の文献検索には不向きといえます。

出版形態は月刊版と年刊版があり、最新年の検索には月刊版を、それより遡って検索するには年刊版を使用します。月刊版は、

\* Subject Section（主題索引）：主題から文献を探す部分 \_\_\_\_\_ Part 1

\* Author Section（著者索引）：著者名から文献を探す部分 \_\_\_\_\_ Part 2

\* Bibliography of Medical Reviews（総説記事索引） \_\_\_\_\_

のように2分冊にわかれており、年刊版ではそれらを再編集したものを発行しています。



その他に List of Journals in Index Medicus と呼ばれる INDEX MEDICUS の収録雑誌リストがあります。内容としては、

- \* Abbreviation Listing (略誌名リスト) : 略誌名から完全な誌名を参照
- \* Full Title Listing (雑誌名リスト) : 誌名から略誌名を参照
- \* Subject Listing (主題別雑誌リスト) : ある特定の主題から雑誌を参照
- \* Geographic Listing (発行国別雑誌リスト) : 雑誌の発行国を参照
- \* Special Listing (その他特別リスト) : Index Medicus 以外の歯学、看護学などの書誌を参照

などのリストがあり、毎年一回別冊で発行されていますが、年刊版にもその年の収録対象誌が掲載されています。このリストに掲載されていない雑誌の書誌事項は、INDEX MEDICUS を調べてもできません。誌名変更の情報は、月刊版の 7 月号 Part 2 に掲載されていますので参考にして下さい。

また、日本の誌名は略されず、ローマナイズの読みくだしとなっています。

例：日本外科学会雑誌 → Nippon Geka Gakkai Zasshi  
臨床病理 → Rinsho Byori  
薬学雑誌 → Yakugaku Zasshi など

では次に、最も利用する Subject Section と Author Section の使い方を簡単に説明します。

### ◇Subject Section◇

ある特定の主題から文献を探す場合に使用します。

月刊版では各巻の前半に、年刊版では全体の後半に掲載されています。文献はアルファベット順に並べられた見出し語の下に収録されています。

この見出し語とは、Subject Section において大文字で印刷されている用語のことです。見出し語によっては、他の用語（副標目）でさらに細かく分けられています。これらの見出し語と細区分に使用される用語を、Medical Subject Headings (MeSH) といいます。目的に合った文献を見つけるためには、この MeSH を知ることが大切です。(MeSH については次回詳しく説明する予定です。)

それぞれの見出し語の下にある論文は、以下の順に並べられています。

#### 1. 英語で書かれた論文

収録略誌名のアルファベット順、同一誌の中では第 1 著者名のアルファベット順です。

#### 2. 英語以外で書かれた論文

論文の言語のアルファベット順、同一言語の中では略誌名のアルファベット順です。

例えば、日本語(Jpn)はイタリア語(Ita)の次くらいに並べられています。タイトルが [ ] で囲まれてる論文は、英語訳されたものです。

<例 1>

①見出し語

① INTERFERON TYPE I

②副標目

② ADMINISTRATION & DOSAGE

③論文タイトル

③ Suppression of reapsing experimental autoimmune encephalomyelitis in the SJL/J mouse by oral administration of type I interferons. ④ Brod SA, et al.

④著者名

⑤雑誌名・出版年・月  
巻・号・ページ

⑤ Neurology 1994 Jun;44(6):1144-8

⑥英語訳されている論文  
文タイトル

⑥ [The use of leukinferon by electrophoresis in children with chronic hepatitis] Uchailin VF, et al.  
Zh Mikrobiol Epidemiol Immunobiol 1993 Nov-Dec;  
(6):116-7



## ◇Author Section◇

著者名から文献を探す場合に使用します。

月刊版では Subject Section の後に、年刊版では全体の前半に掲載されています。文献は、性と名のイニシャルによりアルファベット順に並べられた第1著者の下に収録されています。著者は10人まで採録し、11番目以降は省略されます。第2～第10番目までの著者は、第1著者への参照(see)がついています。Subject Section と違って、論文のタイトルは原語で記載されていますが、例外として日本語・中国語・韓国語・アラビア語で書かれた特殊な文字の論題は、英語訳されたタイトルのみ記載となっています。英語訳された論文のタイトルは [ ] がつけられています。

<例2>

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| ①著者名                  | ①Hayashi O , Akashi M , Fujime M , Hanazawa K , Kitagawa R. |
| ②論文タイトル               | ②Detection of interleukin-1 activity in human bladder       |
| ③雑誌名・出版年・月<br>巻・号・ページ | cancer cell lines. ③J Urol 1994 Mar;151(3):750-3            |
| ④第1著者への参照             | ④Hayashi P see Schupper H                                   |

＊次回 MeSH を中心にした Subject Section の詳しい使い方を説明する予定です＊

<情報サービス係>

## 研究室からの蔵書目録検索サービス

図書館では、学内 LAN(HUMAN)を利用した蔵書目録の検索サービスを行っています。このサービスシステムを OPAC(Online Public Access Catalog)と呼んでいますが、これにより、本学の図書及び雑誌の蔵書目録データベースが研究室等のパソコン端末から直接検索利用できます。

サービス時間帯は、8:00～24:00(月～土曜日)です。

telnet が使える端末であれば機種を問いませんので、ぜひ使ってみてください。ちなみに IP アドレスは、202.253.22.20 です。

システムに接続すると、プロフィール名、パスワードをきいてきますのでいずれも OPAC 1 (又は OPAC 2, OPAC 3) と入力後、ガイドに基づいて検索を行ってください。

なお図書館では、この蔵書目録のデータベースを充実するため遡及入力の作業を進めています。

またさらに近々 WWW のホームページを構築し、この OPAC を含めさまざまな情報を統合的に提供する予定です。

## 資料収集 一看護学関連資料と講義の参考資料の整備

新しく看護学科が設置されたことにともない、図書館では看護学関連の図書や雑誌の資料が順次整備されつつあります。

図書については、医学専門分類の WY (看護学) のところに配架されていますのでご利用ください。また雑誌についても和雑誌45タイトル、洋雑誌21タイトルを購入しています。これについては他の雑誌の混配してあります。購入タイトル等の詳細については、図書館のカウンターでお尋ねください。

また、図書館では今年度より講義に関連した資料の収集・整備を行っています。具体的には、シラバス(講義要項)で教官が指定した講義の関連資料を図書館でそろえ、学生の皆さんの自学自習用に提供しようというものです。これらの図書は基本的に1点ずつそろえていますが、別置せず他の図書と同じくそれぞれの主題(分類)のところに配架してあります。次年度も継続する予定ですので、ご利用ください。